



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 堂友會の成立を賀して                                                                          |
| Author(s)    | 西村, 時彦                                                                              |
| Citation     | 懷徳. 1924, 1, p. 5-14                                                                |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/88684">https://hdl.handle.net/11094/88684</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

じて疑はないところであります。此れ等のことを考へまして、本日この堂友會の成立しましたことは、私におきましては、衷情誠に欣喜に堪へないのであります。茲に發會の式を舉げらるゝに當りまして聊か感ずるところを述べまして兼ねて本會の前途を祝福致します。

## 堂友會の成立を賀して

西 村 時 彦博士

諸君には久々でお目にかかる次第でありまして、私が東京に參つてから、度々こちらにも參りましたが、落着いてお話を申上げると云ふ機會がなかつたのであります。祭典などの様な儀式の折にお目にかかるに過ぎないのであります。然るに今日は斯うして多少の時間を私に與へられて諸君のお目にかかり私の感じました所をお話するといふことは、別來殆ど初めてかと思ふ位で、寔に衷心欣喜に堪へない次第であります。

今年の祭典は十月初日に行はれる筈なのをば東京の地震の爲にお延ばしになつて、さうして、此の際のことであるから今年だけは極く簡略に祭典を執行されるといふことであります。祭典だけには私は必ず參ると申し乍ら本年は東京の方はあつた天災の爲に忙しいことでもあり、或はお斷りをするかも知れないと思ひましたが、併しどんな繰合をしても一寸でも出て見たいと思ひましたのは、この堂友會の發會式の爲である。

この發會式のあることをば吉田君から聞いて私は大變喜びました。何も我が勸めてやらせたのでもない、自發的に斯う云ふ會をお拵へになつて、只今松山先生のお述べになつた様に、七星霜の間に生れた一つの實が結ばれた様な氣がして、此は善い事だ、此には私も出席して見度いと斯う考へたのであります。萬一交通機關が復舊し

ないで不自由であつたならば出席が来ない、其の時には少しなりとも意見を書いて送るから、それを吉田君から朗讀して貰ひたい、東京から電信が来た時は直ぐに引返し得られるといふ位に交通機關が復舊したならば私は行くといふ約束をして居た所が幸にして鐵道も開通をして東西の往復も便利になつた。因て肝腎な用事を繰合せて出て參つた次第であります。

扱て私が出て參つたに就ては私が何か申し上げるべき話が澤山ありさうに見ゆる。書いて送ると申して置いて此處で直接お話するのだから何がよく調べて居つて講演をするかと思はれるかも知れないが實は何にもない。斯うして出て來たら何にも無くなつて了つた。妙なものです。さうして餘り他人行儀に何かウマイとを言て見たいと云ふので講演段取などよく考へて諸君を一つ喜ばせ様とか云ふやうな意味でなく此の會が出来たに就いて唯私の嬉しさを諸君に通すれば好い。この懷德堂の出来るまで、それから基金の出来るまで、さうして適當なる教授を聘してお出を願ふまで餘程の苦心があつた。これは理事諸君が皆一樣にその艱苦を嘗めたことが大分あつた。精神上の苦痛が大分あつた。所が、それが其後出來上つてさうして松山先生もお出でになり漸漸に事業が進んで來て聽講生が引き續いて何年も見ゆる人がある。さうして堂友會が出来た様になつたのは即ち實が結ばれたのであります。此の事業に因つて諸君は精神上の益を得られて、さうして堂友會を建てる必要を感じるに至つたのは懷德堂の一の成功と看なければならぬ。私も最初から此の事業に携はりて居つた一人として誠にいい事が出來た、此の會員名簿には六十人とか或は八十人とかある。それだけの人が懷德堂の礎であります。人よく道を弘むるで、道を弘めるのは懷德堂といふ建物が弘めるのではない、人が弘めるのであります。懷德堂の礎となるべき人即ち堂友會員諸君を得たので懷德堂の將來は安全である。懷德堂の興廢存亡に際して此の道を維持して行かうと云ふ人がこれだけ出來たと云ふことは實に何うも嬉しいことである。斯う考へたを又一つ諸君に傳へたいと云ふのが出席した目的である。別に今日講演としては何か一つの筋を立てて講演する程のものはない。唯マア東京から嬉しくして西村は出て來たとさうして此の堂友會に一言を述べたと云ふことだけを記憶して戴きたい、それは即ち道の爲

である。道を得た諸君は更に道を弘める人と爲るのである。此の懷德堂の興廢存亡に關して力になる方が大勢出來たといふことが此れが私の嬉しい原因であります。此の情を能く察して戴いて將來道の爲勵いて戴きたい。どうも今日は私は亂世かと思ふ。天災といふものが人事に關係あると爲して、さうして天が禍を降して人を戒める、即ち天譴と云ふとに看做すのは古人の思想に現はれ文章に見ねることであります。成程さう云ふ氣もする。併し地震と云ふ原因はチャント明かであるのである。此を人事に牽附けると云ふことも無理ではあるが、時代が時代であるから、是は天譴である、新聞にも出て居る様な次第である。從來日本人の腹の中が空虚になつて居つた。表面は文明になつて居るやうであるけれども實は空虚なのである。其の時に大地震が來たから非常に恐怖心が起るさうして恐怖の結果はヒドイ慘酷な事が出來た。慘酷など云ふものは恐怖心から起る。必ず腹の中が充實して度胸がすわつてゐる人で虚實を正せる人にはさう云ふことはない。人殺しも臆病者がやる。臆病者を脅した爲に臆病者から殺された、昔話も澤山ある。是れは前後の辨がないからである。今度の東京の災害は實に大きいあれだけの大破壊、大火災で、其の災害は大きい、併し、この災害がなくて日本人が空虚になつた。その儘の狀態が續いたならば其精神的災害の方物質的災害よりも更に大きくはなかつたか知らんと思ふ。マルデ全く浮華輕佻殆ど君父といふことも忘れて了つて唯自己一身の利害、自己一身の享樂人間生活の享樂といふことのみを能く云つてゐる。唯自己が樂むと云ふことだけを知つて、我儘は仕放題、子供をうち棄て、親を忘れ、唯男女間の淫蕩な風にのみ奔つて居る、男女間の醜き事件、又は私利私慾にのみ齟齬として義理人情も忘れると云ふやうな事實が新聞記事に現はれてゐるのは一つ二つで少いにした所が裏面に蔽はれてゐる事が幾何もある。寔にヒドイとになつて精神上のことは棄てられたかの如く見えて居る。それを一寸も悪いことだと思はずにこれが現代文明の然る可き事だと思つて繼續して行つたらば日本の將來は寔に危険なことであつたらうと思ふ。地震は決して幸な事ではない。不幸の至りであるがこの地震によつて更に内面的のことがスツカリ暴露して了つたといふことは會社でも官衙でも責任といふものを忘れて我先に遁け出して了つた狀態で分る。大切な文書類を取り出す餘裕が

あつても這入らない。地震だけで火事はヨモヤ有るまいと思つて取り出さなかつたと言つてゐる人もある。所が地震に火事は附き物である。兎に角それだけの用意をして、肝腎な物だけさねも取り出す者がなかつた。それで株主名簿が焼けて了つたとか、これからカードを拵なければならぬとかいふ具合で經濟上の復活といふことに就ても餘程手數がかかるだらうと云ふことである。不可抗力とは言ふものの、何うも人事を盡したといふことは言へない。耐火耐震の建築は餘程問題になつて居りますが重要書類若くは大切な圖書等の保管は絶對安全と稱することは出来て居らなかつた。世を擧げて孟子の所謂放心の態であつたのが地震と火事の爲に暴露した。地震と火事とがなかつたならばいつでも内面的の醜陋は掩蔽されて其儘救ふことは出来なかつたかも知れない。近來東洋の道德なんかを言つてゐたら現代の落伍者と云ふとを能く言はれる。それが恐はさに言ひ出す者が少ない。それを救ふ道がない。一方文部省の如きは漢字の制限をして字數を減らす。文章體を廢して口語體にするとかいふことをやつてゐるが、口語體といふものは女性的であり、唯一語で盡くる所を女のくどくど練言つやうに長々と書かなければならぬ。併し口語體は口語體で使途がある。我が情を寫すといふこと、又はむづかしい道理を説明することに就ては必要な場合があります。併し今の書生の手紙などを見るとよく書いてはあるが、一寸もキリツとした感動を興へる所がない。従つて剛健質實を尙ぶ精神教育などには尤も不適當である。先達發表された漢字制限などと云ふことは識者は今日重を置いて居ない。何となれば克己心といふことは立派に熟語と同じく通行して居るのに克の字がない。其他道德上の字がない。私が斯う話をして居る時に諸君がガヤガヤ騒いだなら。皆様靜肅に願ひますといはねばならぬが其の肅の字がない。さう干要な俗語さへも制限されて居る。あんなものは本氣でやつてゐるか、如何か判らないが、無茶な制限が出来るものぢやない。さうした風では、如何にして精神の弛びを引き締めて行くことが出来ませう、精神を引締めてゆくべき本家本元が弛んで居るから一般の風俗がますます腐敗墮落したであらうと思はれる、遅かつたのではあるが今日では不幸中の幸といふものが、大地震大火災の爲に内面の缺陷は暴露して丁

つた。此ではいけないといふことが多少世間の人に判つて來た。餘程世間の人は氣がついて來た。是は喜ぶべき事であるのに、不思議なことには世人のそれに氣が着いて來てゐることを怖るゝ人があります。若い文學者などの中に此に由つて時代が逆戻りしやしないかと云ふのであります。そんな者は文學者といふのではない。唯淫風を煽動する小人である。風俗が引締つて來たら淫風煽動の小説が行はれぬから世人が自覺を恐れるのではあるまいが、誠にけしからぬ事である。私はこれから世間の人心が變らなければならぬと思ふ。變るんぢやない。本に復らなければならぬと思ふ。根本は何かと云ふと日本に於ては明治天皇の下されました所の教育勅語である。其の實行である。此を唯口に稱へるといふだけでは何にもならない實行して効果を擧げるといふことが出來なければならぬ。此の災害に省み、殊に朝鮮人騒ぎの流言。―此は私が東京に居つて實見して居ります。九月一日は電燈が消れた水道は出ない。電話が通じない新聞もない。マルで暗黒になつた。此が恐怖の原因になつて、眞暗になつたから朝鮮人がやつて來て日本人を斬るから一ヶ所に集つて居れと言つたのは何處から出たか今日になつても分らない。一犬影に吠ゆれば百犬聲に吠ゆ、一人虚を傳ふれば萬人實を傳ふで二日の夕方に起つた流言は鎌倉でも聞いてゐる。東京でも神奈川でも聞いてゐる。といふ位でその傳はることの早いこと……私の住宅の上には島津公爵の居られる非常に大きい邸がある。木柵を破つて了つて庭内には逃込んだ老若男女幾千人の人が集つて充滿してゐる。私も行つて見た。どうして聞き傳へたものか、何うしてこゝも早く集つたものかと思つた位です。それだけでそれがおさまつたかと云ふと中々さうではない。その暗黒には朝鮮人と間違つて日本人を虐殺したのがある。さう云ふことを見ると暗黒の中の流言だから成程恐怖心も起るとは云ひ乍ら一面に於て通行人を誰何して日本人と朝鮮人との見境ひつかずに殺して了つたといふことは如何に無教育の者とは言ひ乍ら今から考へて本當とは思へない。世を擧げて放心の所へ恐怖に襲はれて遂にはそんな悲む可き事件が出來した。其の根本に遡ると云ふと、世の中は風俗が亂れ教育の根本が謬られて居つたからである。此の災害に鑑み此の混亂の狀態に反省して教育の根本に立返らなければならぬ。今日では識者は勿論分當局者も一般人も大分此處に氣がついて來てゐる様であります。そこで私の信ずる所とては其の根本に反くといふことは明治天皇の教育勅語を實行するにある。能く教育勅

語を味ふて腹の中にそれが沁みこんで行くといふにはこの教育勅語が總て生きて行く様にせなければならぬ。これには何うしても儒教でなくてはならぬ。即ち斯の道は皇祖皇宗の遺訓にして云云と仰せられた。斯の道と稱して御述べになつた維れ忠維れ孝孝友和信恭儉といふ様な徳は總て矢張り儒教中の教であります。其の教を御列ねになつて斯の道と稱して皇祖皇宗の遺訓であると斯う仰せられた。即ち孔子の道は皇祖皇宗の遺訓に一致してゐるが故に其の教を施されて居られた。其の遺訓を擧げられて斯の道と稱せられた。さうして見ると云ふと儒教の道を研究するといふことは教育勅語の註釋をするといふことになる。教育勅語ばかりを奉體するには是非儒教を讀んで見なければならぬ。さうして心に分つて初めて實行するといふ風に仕向けるには此の教が肝腎で決して棄つ可らざるものである。益々儒教を重んじて之を研究しなければならぬ。

今後は必ず教育勅語の實行といふことが世の中に唱へらるゝに相違ない。實行に就てはその助けとなる儒教を研究すると云ふことにならねばならぬが何うであらうか、まだそこは懸念に堪へないのである。教育勅語を今日まで皆尊奉して居るが如くに見ゆるがそれは形式に過ぎないかのやうな憾がある。それは實行が伴れぬからである。我が懷德堂の堂友會は儒教を研究して教育勅語の註釋とする。而して之と實行せねばならぬ。道を同くし志を同くする者は此の實行を旨とすべきである。「君は此の頃斯々の事がある。さうなナア」とお互に角の立たぬ様に忠告しなければならぬ、眞率に出でなければならぬ。我々の性格が眞率に現はれる様になつたなれば、少しも窮屈なものではない。孔子は斯く／＼であつたからといつて杓子定規にやつてはイケない。そんなに窮屈になつてはいかぬ。實行と云ふものは窮屈になつては一生涯續かないものであるから直率愉快にやらなければならぬ。過あれば率直に忠告する、忠告に従つて己を矮めて行く不義の行ひは良心が咎める。そこで惡を去て善に就く、自然に實行の習慣が養はれることになる。平生の集會には直率な交際をして銘銘氣のユックリした人はユックリするだらうし、性急な人は性急にやるだらうがそんな事は構はずに打ち解けて交際して行くならば此の會は繼續して行くだらうと思ひます。單に形式計りでは駄目である。親しく話をする人もあれば又話をせぬ人もあら

うが、その裡に親疎の別は亡くなつて来る。質問が出来て来ると其の内に馴染が出来て来ると「何うも自分に判らぬが君は何うだ」と言つて意見も聞く。何事でも物を判斷する上に就て都合が宜からうと思ふ。私は東京に移つてから舊友もある。學校の友達もある。三十年四十年來の友人もあるが皆住居が離れて居る。各々仕事を持つてゐてお互に忙しいが、併し何うしても友人でなくてはならない。思ひ餘つた時の相談は友人でなければならぬ。諸君は堂友會以外にも友人もお在てなさるだらうが道を以つて集るといふ者は餘程人格も違ふ。誠を以て交る、己の飾を棄てゝ直率な飾といふものがないのが交際の道である。飾らずに行くと短所と長所とを人に知つて貰つて初めて人が信用する。短所を隠して人に過信せられて不幸な目に遭ふた事は幾何もあります。

さて勅語に對する信念は洵に薄くなつてゐるが如くに見えて居る。それを再び引き戻して行くには之を羽翼する所の儒教を研究するといふことに就て教育當局者が何う見てゐるかはそれは疑問である。今の漢字を制限するにしても前述の様な道德上の必要な文字がないやうな制限では儒教に對する考も知れたものである、併し今度の大災變後多少頭を回らして儒教尊重の氣運が來ねばならぬ。我々懷德堂關係者は夙に時勢がこうなつて來るものと信じて居たのである、而して懷德堂に學んだ諸君も先見の明あると言はねばならぬ。して見ると云ふと、堂友會の諸君は先覺者である。徐徐に頽風を引き戻してさうして我々の信する所の道を弘めて行き廣く此を他人にも及ぼして行かねばならぬ。復興といふことが能く流行る文句になつてゐるが、此が精神的の復興となつて世の中が更に改まるといふ位にして行かなければならぬものと考へる。何うかしてさう云ふ時代が來たならば、この懷德堂なるものは無意義な仕事ではない。寔に古臭い仕事の様に言つて居た者は輕薄でこれは決して無用のことぢやなかつたと考へて來る時代が目前に迫つて來て居りはしないかと斯う考へる。懷德堂なるものが出來ましてから多少の年月を経て基金も相應に集つたが要するに家が立派だから効果が擧がる。金があるから頼りになるものでなくて是人の精神に因つて堂の主義が實現するものであります。將來堂友會諸君は各々自ら此の懷德堂を我が物と思つて戴き度い。是は自分達の道の研究所であると斯う云う考へて此の堂に集つて、さうして更に研究をして行か

れんことを望むものでります。

何うしても道德上の話は窮屈になる、窮屈だと人が寄りつかない。そこで私が考へる所は道德上の考はそんな窮屈なものでないと思ふ。自分の身を飾り繕つて見様と思ふと窮屈になつて来る。これは前申した様に直率にやらなければならぬ。過を隠すといふと窮屈のものである。我々の信する所では、道德と云ふものは守らなければならぬと云ふ考を有つてゐる。道德に背いて居る事を不知不識してゐるかも知れぬ。之を注意して呉れるのが友達である。「君それはいかぬぞ。」と言はれて「成程悪い。」と改めて行く。利を以て集る人は利が散すれば散して了ふ。道を以て集る友は終身一生は偕置き幽明を隔てゝも變らぬものである。それで私は何時も考へる。何事をするにも出發點が正しいければ精神上の苦痛はない。失敗しても自分の心を慰める事が出来る。出發點に己を欺かないと云ふとが必要である、出發點に何か自分に面白からぬことがあると途中で精神上の苦痛がある。その他の事も直率にやつて善い所と悪い所とを暴露してやつて行く。(私は疵の方が多くて善い所は少い。人に嗤はれてゐるものであります。これが人に交はる最上の心得だと思ふ。是が實行といふことの手始である。唯判るといふだけでは何うも判らない。文學と云ふものに私は三つの條件があると云ふことを能く人に言つて居る。ここに一つの詩がある。其詩の意味が分るといふのが一の條件其の分つた所の意味を人に向つて之を説き聞かせ得るといふのが一の條件文學が唯分つた説明し得ると云ふだけでは一種の趣味を有つてゐるに過ぎない。文學者といふものはそれを作り得るといふ條件がなくてはならぬ。畫かきと云ふのも畫を描くから畫かきなので、畫が分るから畫かきではない、雪舟の畫は此處が旨いのだといふのはそれは畫の批評家なのであります。畫を描かない畫かきはそれは畫かきとは云へない。道德といふものは餘程早く分るものである。誰でも分るが、之を實行するといふことがお互に難しいものである。「人誰か過ちならんや。でその過に氣がつくといふ事は難しい。實行するが三日坊主で長く行くといふとは之は難しい。唯實行といふ事が缺けて居つた爲に腹が出来ない。現代の人も腹の出来て居なかつた證據は此の大震災大火災で暴露して了つた。役人も會社員も逃げ出して了つて責任觀念が一つもなかつた。承る所

によると住友銀行などでは表彰されなれた人もあるさうだが又或る會社では一人も殘らず逃げ出して了つて唯一人小使が居つて晝の間に大分始末をして居つた荷物を持ち運びが出来なかつた爲に遂に焼かれて了つたと云ふ話もある、島津家の別荘が鎌倉にあつて夫人を始め御家族は幸に食卓の下に這入つて壓死を免れたと承るが、彈ね飛ばされて椽の下に這入つたお子さんもある。其時女中も椽の下に這入つて長時間お子様を斯うして身を以て庇ふて居つたと云ふことであります。かういふ小使とか女中とか云ふ下級の人に美しい觀念があると云ふのは多く承る所である。然るに教育のある智識階級には却て美談が少い様である。謂所教育なるものが間違つた教育ではなからうか、現代の人は權利を要求するといふことは餘程發達してゐるが、義務は怠り勝である。責任觀念の缺乏は通弊である。儒教で腹の出來てゐる人はさうではない。將來は何うしても儒教を尊重する教育が行はれねば眞の文明とは云はれぬ。信する所を學び信する所を行ふ人々に因て此の懷德堂は出來て居るが、其の實が結んで堂友會が出來たので、尙更結合が固くなり、その信する所の道が家内及友人に及ぼされ、遂に社會に及ぶことになるであらう。今は會員の數は少きを憾まぬ。將來は必ず多人數に及ぶと考へる。それで諸君は懷德堂の興廢存亡を頭に置いて戴き、世間の爲には又自己の信する所を及ぼして行くこと云ふ覺悟を持つて戴きたい。獨り其の身を善くするといふ事は力の足りないか時に遇はぬ爲で已むを得ぬことである。併し人はどうなつても我一人よかれの獨善主義はいかぬ。亂世に山中に這入り込んでの事ならいさしらず。今日の世の中は狐獨では生活が出來ない。隱遁生活獨善主義ぢやいけない。それには、自己を善くして更に家族に及ぼし、有力の士は遂に天下を善くする事をしなければならぬ。獨善主義ばかりではいけない。兼善主義の心を以てやつて行かなければならぬ。何うしても人類は獨立孤生して行けるものではなく共存して行かなくてはならぬ。社會一般の諸立即ち共存共榮といふことが兼善主義である。諸君の會合は兼善主義に出づるものと思ひますから打融けて直率な状態で窮屈なといふとでなく、他人にもそれを言ひ聞して、懷德堂はいい所だが、彼處へ這入ると窮屈になると云ふ様な感じをさせない様にして此の會を精神的游息の俱樂部とするやうにありたいと思ふ。私は返す／＼もこの會の永く續か

んことを希望する次第であります。

左の一篇は曩年中央公會堂に於て藤樹先生遺德顯彰會の請に應じて做し、講演の要旨なり。頃日、堂友の間に、藤樹先生の遺蹟を訪ひ藤樹神社を拜せんの議ありと聞く。會たま、懷德の發刊に際し、幹事余に徴するに文を以てす。因りて筐底を搜りて是の篇を得たれば、其要旨を録して以て之が責を塞ぐ。大正十三年六月三十日。懷德堂教授松山直藏識す

## 藤樹先生學問の骨髓

今を距ること二十數年前、余が笈を負ふて、京都に學べりし時、當時刊行せられし近江聖人と云へる一小冊子を讀みき。這是些たるに一少年讀本に過ぎざりしも、余をして始めて藤樹先生の傳記を讀むの機會に接せしめしものは這書なりき。今猶は當時の記憶の髣髴として存するものあり。そは之を讀みて涕淚滂沱、卷を終ふることあたはざりしことなり。先生伊豫の大洲に在りて、加藤侯に仕へし時、郷里に在る母を慕ふて之を迎へんと欲し、江洲小川村に歸省し、其の切切の情を述べて、大洲に伴ひ奉らんことを乞ひしも、母は郷里を離るゝことを厭ひて、之を肯んせざりしかば、先生已むことを得ず、堪へ難き別離の情を忍びて、單身大洲に還れり。翌年韓詩外傳の臯魚の傳を讀みて、樹欲靜西風不止子欲養而親不待の處に至り、感動して止まず、其の翌年遂に母を養はんがために、仕を辭し郷に歸り、奉養の孝を盡せり。是等の事蹟を讀みて、甚く其の至誠純孝に感動し、涕泣已む能